

皮心伝心

梅毒の最近の動向

本邦における梅毒の動向は、終戦直後および昭和40年と昭和62年にピークをもつ約20年間隔の流行であったが、HIV感染に対するPRの普及とバブル崩壊による不況も影響してか、それ以降は減少したまま推移していた。しかし、平成16年以降に再び緩やかな増加傾向となり、平成24年以降には急激な増加がみられるようになった。性感染症(STI)では最多の性器クラミジア感染症がピークを、また、梅毒がナディアを記録した平成14年、15年には、梅毒の報告数は性器クラミジア感染症の1.2～1.3%にすぎなかった。しかし、性器クラミジア感染症はその後に減少傾向を辿り、反対に、梅毒は増加傾向を、そして平成24年以降には急増していることから、厚生省性感染症センチネル・サーベイランス研究班が実施した実態調査¹⁾をもとに算出した平成27年の早期梅毒の年間罹患患者例数推計値では、性器クラミジア感染症の11%までこの10数年で急増している。このように、梅毒はもはや過去のSTIではなく、主役とはいかないまでも最近では脚光を浴びている。そのため、国立感染症研究所(NIID)が平成27年2月に発刊した病原微生物検出情報vol.36, No.2(No.420)²⁾で、毎週行っている感染症発生動向調査週報でも平成26年から3年連続(通巻第16巻第47号³⁾、通巻第17巻第44号⁴⁾、通巻第18巻第12号⁵⁾)して注目すべき疾患に取り上げている。また、本年(平成28年)4月に日本性感染症学会は会員に対し注意喚起している。

今回みられる傾向として、早期顕症梅毒(I期、II期)と無症候梅毒の増加が目立ち、男性では20～40歳代、女性では10～20歳代の増加が目立つ。そして、男性では、平成20年以降から同性間性的接触による感染が、また平成24年以降には異性間性的接触による感染も増加している。女性では、同性間性的接触による感染はないものの、平成24年以降に異性間性的接触による感染が増加している。

それ以外の特徴として、この増加は全国的なものではなく、都道府県別では東京、大阪、愛知、神奈川、福岡の5都府県からの報告が全体の60%を占めるなど、大都市に集中している²⁾。また、大阪府の統計⁶⁾ではあるが、この増加は平成22年から平成27年の5年間で、全体数では約5倍に増えている。そして、とくに女性ではこの5年間で約13倍に増えており、平成27年の報告は前年の3.5倍と急増している。この傾向は全国調査でも同様であるばかりか、平成28年前半の集計でも平成27年を上回る勢いである⁷⁾。

上記のごとく、梅毒の動向として最近かなりの勢いで増加しており、とくに妊娠可能年齢の女性の異性間性的接触による増加は注目に値する。また、それに伴い先天梅毒の報告数も増えている²⁾ことは由々しきことであり、その全容の早急な解明が待たれる。

<文 献>

- 1) <http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>
- 2) <http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/iasr/36/420j.pdf>
- 3) <http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2014/idwr2014-47.pdf>
- 4) <http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2015/idwr2015-44.pdf>
- 5) <http://www0.nih.go.jp/niid/idsc/idwr/IDWR2016/idwr2016-12.pdf>
- 6) <http://www.pref.osaka.lg.jp/chikikansen/aids/baidoku.html>
- 7) 川畑拓也：大阪府における梅毒の動向，平成28年度大阪STI研究会総会，2016

立花 隆夫

(大阪赤十字病院・皮膚科)